

A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

29

ロレンス

チャタレイ夫人の恋人

伊藤 整訳

てんとう虫

伊藤 礼訳

島を愛した男

英国、わが英国

中央公論社

ロレンス

訳者 伊藤 整
伊藤 礼

LADY CHATTERLEY'S LOVER

Illustrated by Luigi Brogini

Copyrighted by Arnoldo Mondadori Editore.

The Japanese right arranged through

Italia Shobo Co., Ltd., Tokyo

昭和44年4月1日初版印刷

昭和44年4月10日初版発行

発行者 山越 豊

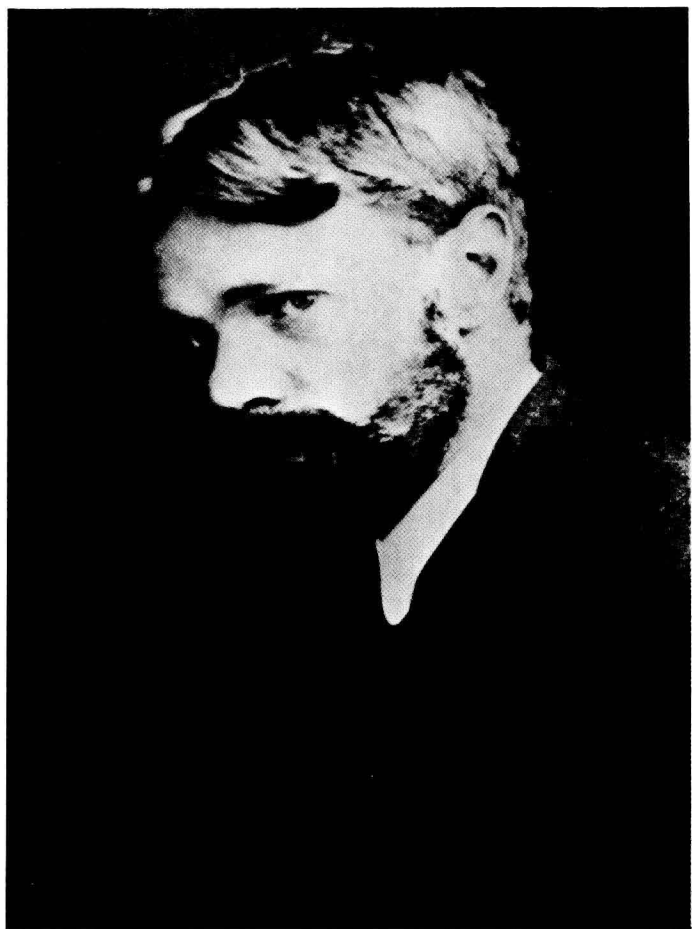
本文製版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34



ミッドランド地方の秋　　なだらかな丘と深い森にかこまれたイギリスのミッドランド地方は、炭鉱地帯としても知られている。この地方の自然は、青年期のロレンスに大きな影響を与え、『チャタレイ夫人の恋人』など多くの作品の舞台となった。



ロレンス

目次

チャタレイ夫人の恋人

『チャタレイ夫人の恋人』の性描写の特質

337 3

てんとう虫

355

島を愛した男

437

英国、わが英国

467

解説

年譜

530 508

チャタレイ夫人の恋人

第一章

現代は本質的に悲劇の時代である。だからこそわれわれは、この時代を悲劇的なものとして受け入れたがらないのである。大災害はすでに襲来した。われわれは廃墟のまっただなかであつて、新しいさやかな棲息地を作り、新しいさやかな希望をいだこうとしている。それはかなり困難な仕事である。未来に向かつて進むならかな道は一つもない。しかしわれわれは、遠まわりをしたり、障害物を越えて這いあがつたりする。いかなる災害がふりかかろうともわれわれは生きなければならぬのだ。

これがいいたいにおいてコンスタンス・チャタレイの境遇であつた。ヨーロッパ大戦は、彼女の頭上にあつた屋根を崩壊させてしまったのだ。その結果彼女は、人間には生活して悟らなければならぬものがあることを知つたのである。

一九一七年に彼女はクリフオド・チャタレイと結婚した。それは、彼が休暇を得て、一カ月の故国に帰つてゐた時のことであつた。彼らは一カ月の蜜月を送つた。それからクリフオドはフランダース（ウエスト・フランダース。第一次大戦中英国とベルギーが固守したベルギーの州）へ戻つてゐた。だがそれから六カ月後に、彼ははずたずたに負傷して英国へ送られかえされた。妻のコンスタンスはその時二十三歳で、彼は二十九歳であつた。

彼の生への粘着力は驚くべきものであつた。彼は死になかつた。ひどい負傷もどうにか回復しそうになつた。二年のあいだ医師の手にゆだねられていたのち、彼は治癒の宣言を受けた。そして、再び彼は人生へ戻ることができたのだが、彼の腰から下の半身は永久に麻痺したままであつた。

それはちょうど一九二〇年のことであつた。クリフオドとコンスタンスは、クリフオドの故郷、家族の本拠なるラグビー邸に戻つた。彼の父はその前に死んでいたので、クリフオドは現在では従男爵、クリフオド卿であり、コンスタンスはチャタレイ令夫人であつた。二人はかなりの不足がちな収入によつて世離れたチャタレイ家の世帯を切り盛りし、そのラグビー邸で結婚生活を始めるためにやつてきた。クリフオドには一人の姉があつたが、彼女はもうずっと前に家を出ていた。ほかに近い親戚は

なかった。彼の兄は戦争で死んだのであった。クリフォドは永久に脚部の自由を失い、もう絶対に子供を持つことはできないのを知りつつも、彼の力の及ぶかぎりチャタレイの名を絶やさぬようにするために、煤煙に閉ざされたこの中部地方へ帰ってきたのである。

実際は彼はあまり絶望してはいなかった。彼は車椅子をひとりで乗りまわすことができた。それから、小さいモーターを取りつけた車椅子もあって、それで前庭を乗りまわしたり、邸のなかのひっそりとしたりつばな庭園のなかをゆっくり乗りまわしたりした。彼はこの庭園を内心ではたいへん誇りにしていたのであったが、口先では無関心な様子で扱っていた。

彼は非常に苦しい目に会ってきたために、苦痛に対する感受力がある程度までなくなっていた。彼はふしぎなほど生き生きとして快活であり、血色のいい健康そうな顔と、いどむような青い輝いた眼をしていて、ほとんど活発であるといつてもいいほどであった。彼の肩は広く強靱で、両手はたくましかった。彼はぜいたくな服装をし、ボンド・ストリート(ロンドンの高級商店街)の出来の美しいネクタイをしていた。しかもなお彼の顔には、盗み見るようなまなざしと、足の不自由な人間の持つている軽い空虚感が隠しきれなかった。

彼はもう少しで生命を失うところだったのだ。その結果、残っているものが、彼には限りなく貴重なのであった。あれほどの打撃を受けてもお生きしていることを、いかに誇っているかは、彼のいらだたしげな眼の輝きに明らかであった。しかしそのひどい打撃のために、彼の内部にあったものが滅びていた。彼の感情のあるものは失われてしまったのだ。無気力の空虚さともいべきものがそこにあった。

彼の妻のコンスタンスは、柔らかな褐色の髪と、しっかりと持った、血色のいい、田舎風の感じの女であった。動作は物静かであったが、精力に満ちているように見えた。彼女は、ものをいぶかるような大きな眼をしていた。声は軟らかくなめらかであり、ちょうど生まれ故郷の田舎から出てきたばかりのように見えた。しかし実際はそうではないのであった。彼女の父は王立美術院会員で、一時は非常に有名であった老マルカム・リイド卿であった。彼女の母はかつての盛大な、かなりにラファエル前派のだった時代のフェビアン協会(一八八四年英國に創立された著名な学者を含む漸進的社会主義者の団体)の教養のある会員の一人であった。コンスタンスと姉のヒルダとは、芸術家と教養ある社会主義者との父母のあいだで、いわゆる美学的に反伝統的な訓育を受けた。姉妹はバリやフローレンスやローマへ

連れてゆかれ、そこで芸術の零^{なん}開^き気を吸った。二人はまたそれとは別な場所へも連れてゆかれた。ヘーグやベルリンへ行つて、演説する人々がどんな文化的な言辭を弄^うしてもひるむ氣配のない聴衆の集まつた大きな社会主義者の集会にも出た。

それゆゑ二人の娘は、小さい時から、芸術とか理想的政治などというものにはびくともしなくなつてゐた。そういうものは彼女らにとっては自然な零開^{なん}氣にすぎなかつた。彼女らは世界主義者であると同時に地方主義者であつた。そして純粹の社会的理想と調和するような芸術上の世界的地方主義というものをいだいてゐた。

彼女らは十五歳ころにドレスデンへやられて、さまざまなもの、なかならず音楽を習つた。そこで彼女らは愉快に暮らした。二人は学生たちのあいだで自由な生活をし、男たちと哲学や社会学や芸術上の問題を論じあつた。二人は男たちとまったく対等にやつた。女であるということ、かえつて有利であつた。二人は頑丈^{がんじょう}な青年たちとギターを鳴らしながら森のなかを歩きまわつた。ワンダーフォーゲルの歌をうたつた。まったく自由であつた。自由！それはまことに偉大な言葉であつた。広々とした野外に出て、朝の森に行き、すばらしい喉^{のど}を持つた若い男たちといっしょにいて、思うままにふるまえる自由

——なかでも——自分の好きなことを言えるという自由。最も重大なことは、しゃべりちらすということ、感激したおしゃべりの交換ということであつた。恋愛は単に二の次のものにすぎなかつた。

ヒルダもコンスタンスも十八になるともう試験的な恋愛の経験を持つてゐた。彼女らと情熱的な話をしあい、元氣に歌をうたい、そのうゑに何の氣がねもなく木のうでいっしょにキャンプもした青年たちは、当然のことだが、恋愛關係を求めた。娘たちは思いまどつてゐたのであつたが、しかし恋愛については幾度も話したことだし、恋愛は何よりもたいせつなことでされてゐた。男たちは非常に下手^{したて}に出て、それを熱望した。娘が女王のようにふるまつて、みずから賜物を与えることがどうしても悪いことだらう？

こうして姉妹は、自分が最も微妙なうちあげた議論をしあつた青年たちへ、おのおの彼女らの賜物を与へたのであつた。議論や論争というもののほうが偉大なものであつた。恋愛や身体^{からだ}の交渉は、ただ単に原始への復歸にすぎず、恍惚^{くわくご}感を低めるものにすぎなかつた。そのことがあつて以後相手の男にいだいてゐた彼女らの愛情は薄くなつた。そして男が、自分のプライヴァシーや内的自由のなかに侵入してでもきたように、男を憎む氣分にな

っていた。というわけは、少女としては、絶対的な、完全にして純粋な高貴な自由の実現ということに、個人の権威と人生における意味の全部があると考えたのも当然だったのである。少女にとって人生はそれ以外の何を意味しよう？ 古くさい下劣な関係や隷属状態をふるい落とすことのほかには。

どのように感傷化しようとも、このような性の交渉は、太古からある下劣な関係とか隷属とかいうものの一つなのだ。恋のほめ歌を作った詩人たちの大部分は男であつたのだ。女性はずねに、恋よりもっと善い何か、もっと高貴な何かが存在していることを知っていたのだ。しかも現代の女性は、いっそう決定的にそのことを知っている。女性の美しい純粋な自由というものは、どんな性的な恋愛よりもさらに無限に驚嘆すべきものなのだ。唯一の不幸な点は、男性がこの問題では女性よりはるかにあとに遅れてぐずぐずと歩いていることである。男性が犬のようにセックスにだけ熱中していることである。

だから女は譲歩しなければならなかつたのだ。男というものは、欲望を持った子供のようなものなのだ。女は男の欲望に譲らねばならなかつたのだ。でなければ男は手におえなくなり、がまんならぬことを始め、今までの楽しい交渉をめちゃくちゃにしてしまう。ただ女という

ものは、自分の内部にある自由な個我を失うことなしに男に譲歩することができたのだ。セックスについて歌ったり書いたりした連中は、このことを十分に考慮に入れていなかったのだ。女は、ほんとうは自分を譲ることなしに男を受け入れることができるものなのだ。まことに女は、男の力に支配されることなしに男を受け入れるのだ。むしろ女は男を支配するためにセックスを利用することができたのだ。というのは、セックスの交わりにおいて、女は控えめにしている、自分が悦びに達せず、男だけを終わらせ消耗させればいいのだ。そしてそのうち、女はその結合を持続して男をただの道具にして置き、自分の興奮と悦びを作り出すこともできるのだ。

戦争が始まるまでにはこの姉妹はどちらも恋愛を経験していた。戦争になって、二人は急いで帰国した。二人とも言葉の上での接近、つまりお互いに話しあうことに深い興味を感じていなかったならば、男と恋愛に陥ることがなかったであろう。ほんとうに頭のいい青年と幾月ものあいだ、毎日のように熱情的に何時間も話しあうということには、驚くべき、深刻な、信じることもできないような喜びがあった……それは彼女らが実際それに直面してみるまではわからずにいたことだった！ 《汝に語りあう男性を与えん！》という天国の約束のような言

葉は一度も聞いたことはなかった。その約束がどういうものであるかに彼女らが気がつく以前に、それは実行されてしまったのである。

だから、これらの生き生きした、魂を明るくするような議論のために生まれた親密さの続きとして、からだの上の交渉が避けられないというならば、それは仕方のないことだ。それは一つの章の終わりのようなものであった。肉体の交わりにはそれ特有の喜びがあった。それは自己の存在を確認する最後の療養、肉体の内部に奇妙にひろがってゆく戦慄的な喜びであった。それは一つの文章の結末を示す最後の言葉のような、主題の切れ目を示すために挿入される一並びの星印の与えるような刺激的なものだった。

一九一三年の夏休みに彼女らが帰国した時には、ヒルダは二十歳でコニイ（ダンス）は十八歳であった。父親は、二人がともに恋愛の経験を持っていることをはつきりと見てとった。

だれかが言ったとおり *L'amour avait passé par là*（恋はそこを訪れた）だった。だが彼自身そういう経験を持っていた人間であったので、彼は娘らの生活を拘束しなかった。母親はその時、死ぬ数ヵ月前の神経症の病人であったが、母はただ彼女の娘らが《自由》であり、

《自分の生活を充実させる》ことのみを望んでいた。彼女は自分というものをしっかりとつかんだことがなかった。彼女にはそれが許されなかったのだ。その理由がどこにあったかは不可解である。というのは、彼女は自分だけの財産を持っていたし、自分だけで生きる途もあったのだから。彼女は夫を悪く言っていた。だが彼女が押しつけることができなかったのは、実は彼女の精神に加えられていたある種の古い權威の印象であったのだ。マルカム卿は、この神経質な、敵意に満ちた癩癰の強い妻を、好きなようにふるまわせておいて、自分だけの道を歩いていたのだから、それには何の関係もないのであった。

そういうわけで娘らは《自由》であった。二人はドレスデンに、音楽に、大学に、青年らのところにまた戻っていた。彼女らはおのおの自分の青年を愛していた。そして青年のほうもまた精神的な、魅惑的な熱情で彼女らを愛した。一般の青年が考えたり言ったり書いたりするすばらしいことを、彼らも娘らのために考えてやり、話してやりたり、書いてやりたりした。コニイのほうの青年は音楽をやり、ヒルダのほうのは工業を学んでいた。だが彼らは、自分の少女らのためにのみ生きていた。彼らの精神において、その心の興奮においては、と

いう意味では。ほかのことは、彼らは自分では気がつかぬながら、少女から少し除け者にされてた。

この青年たちにおいても、恋愛、すなわち肉体の上の経験が跡を残したことは明白であった。恋愛というものが、男女のからだに印すところの、微妙な、それでいてまちがいようもない変化はふしぎなものである。女は花が開いたように、微妙な丸味をおび、その幼い角ばったところは軟らげられ、その表情は不安にもなり、また勝ちこったものにもなる。男の変化はもっと静かで、もっと内面的であって、肩と尻の輪郭が目立たなくなり、確信的なものが減り、ためらいがちになってくる。

からだの内部に起こる性の現実の快感においては、彼女らは男性のふしぎな力にほとんど圧倒された。だが彼女らはたちまち自分を取り戻し、性の快感は感覚にすぎないと考えて、その自由を失うことはなかった。だが男のほうに、性の経験についての感謝の念から、自分の魂を女へ捧げるのであった。そしてそのあとでは、何か損な取引をしたような顔をするのだった。事後には、コンニイの恋人は少しふきげんになり、ヒルダの恋人は嘲弄的になった。だがそれが男というものなのだ！ 恩知らずで、満足するということがない。彼らを受け入れないと、受け入れないということまで女をきらうのだ。そして彼ら

を受け入れてもまた、何かほかの理由で女をきらうのである。言いかえれば、女のほうでどういふことをしてやっても、彼らはいつまでも満足することを知らぬ子供にすぎない。彼らは何を手に入れても満足しない子供だ、ということのほかにはまったく理由というべきものはないのである。

だが、いよいよ戦争になった。ヒルダとコンニイは、五月に母の葬式に帰国したばかりではあったが、また急いで国へ帰った。一九一四年のクリスマスの前に彼女らのこのドイツの青年は二人とも戦死した。姉妹はそのことで泣き、青年への情熱的な愛着を感じた。だが心のなかではしだいに彼らのことを忘れていった。もはやこの世にいない人間だったのだ。

姉妹は、元来は母のものであったケンジングトン(ドン作西地)の父の家に住んでいて、ケンブリッジの青年のグループと往き来していた。そのグループは《自由》を装い、フランネルのズボンと胸の開いたシャツを身につけ、育ちのいい情熱的な奔放性と、ささやくような甘える声と、敏感すぎるほどの作法とを持っている連中であつた。ヒルダはとつぜん、そのケンブリッジのグループでも年長者の、彼女より十歳上の男と結婚した。その男は金も相当に持っていたし、かなり実入りのある政府の仕事も

引き受けており、また哲学の論文も書くというふうな人間であつた。彼女はその男とウェストミンスターの小ぢんまりした家に住み、政府に關係のある連中のりっぱな交際社会に出入りしていた。その交際社会の連中というのは、第一流とはいえなかったが、イギリス人のなかでの真の知識階級であり、またはそうなるべき人たちで、自分の口にするをよくわきまえているか、あるいはわきまえているような話し方をする連中であつた。

コニイは戦時の楽な仕事をしながら、あらゆることを上品に嘲笑^{やうちやう}するようなケンブリッジのフランネルのズボンをはいた非妥協派の連中と交際していた。彼女の《友達》は、それまで炭坑の特殊技術を研究していたボン大学から急いで帰国してきた、二十二歳の青年なるクリフォード・チャタレイであつた。彼はボンへ行く以前に、ケンブリッジに二年在学していたのだつた。今では彼は、ある目立つた連隊の中尉になっていた。その結果彼は、軍服を着ているためにあらゆることをもっと巧妙に押^や捺^{おさ}することができるようになった。

クリフォード・チャタレイはコニイよりも上流の階級に属していた。コニイのほうは暮らしの楽なインテリゲンチアであつたが、彼は貴族だつた。名門というほどではないにしても、とにかく貴族だつた。彼の父は従男爵で

あつたし、母は子爵の娘であつた。

だが、クリフォードは、コニイより育ちもいいし、《交際社会》の人間ではあつたが、彼自身は奇妙に彼女よりも田舎風であり、もっと臆病^{おくびよう}であつた。彼は偏狭な《上流社会》、つまり地主の貴族階級のなかにいる時は楽しんでいられるのだが、ひとたび多数の中流下流階級の人間や外国人のあいだにはいると、たちまち内気な人間になつてしまふのだつた。もっと正確にいうならば、中流や下流社会の人間や、自分と階級の違う外国人のあいだにはいると、彼は少しばかりこわくなるのだつた。特権階級のあらゆる庇護^{ひご}のもとにあつた彼が、自分自身のたよりなさに気がつくとき、麻痺^{まひ}するような氣持になるのだ。妙な話だが、まさに現代の現象なのである。

それだからコンスタンス・リイドのような少女の、ふしぎな静かな確信が彼を魅惑することになったのだ。この外部の世界の混沌^{こんとん}のなかにあつては、彼よりも彼女のほうが自己を把握^{はくぐ}する力を持っていた。

それにもかかわらず彼もまた反逆者であつた。彼は自分の階級にすら反抗していたのである。反逆といつてはあまり意味が強すぎるだろう。とてもそんな強いものではなかつた。彼はただ、伝統やほんとうの權威というものに反対するところの青年の一般的な習慣に陥っていた

のであった。父親というものはみな滑稽に思われた。彼自身の頑固な父親は特にそうだった。政府というものも滑稽だった。当時の英国の《待て而して見よ》式のやつが特にそうだった。軍隊というものも滑稽だった。頑冥な將軍らがそうであり、特に赤ら顔のキッチナア將軍がそうだった。戦争ですら滑稽なものに思われた。戦争は多数の人間を殺すものであったけれども。

まったくあらゆることが、少しずつまたはひどく滑稽だった。権威とつながりのあるものはすべて、軍隊でも、政府でも、大学でも、ある程度まではみな滑稽であった。そして支配するようなふりをしているかぎりにおいては、支配階級というものが滑稽だった。クリフォードの父のジョフリイ卿は、自分の森林を切り倒したり、自分の炭坑から男たちを引きぬいて戦地に送ったりして、自分は安全な愛国主義者になっていた。それでいて自分の収入以上の金を国家に注ぎこんでいるのだった。彼には、それがまたひどく滑稽なことだった。

ミス・チャタレイ——エマ(クリフォードの姉)——は、傷病兵看護の仕事をするために中部地方からロンドンに出てきた時に、ジョフリイ卿の熱烈な愛国主義のことを、物柔らかに、それでいて実におもしろく話をしてくれた。それを聞いた時、長兄で後嗣であるハーバートは、暫壕用に

切り倒されるその樹木というのが彼のものであったが、思わず笑いだしてしまった。だがクリフォードは、少し不安そうな顔をしてほへえんだだけであった。あらゆることが滑稽であるということは事実だった。だが、それがもっと身近のことになってくると、自分自身が滑稽になつてしまうのではないか……？ 少なくとも彼と違った階級の人間、たとえばコニイなどは何事かに熱中しているのだった。あの連中は何かを信じているのだ。

英国兵士のことや徴兵制の恐怖や砂糖や子供の糖果の不足のことについては、その人たちは熱心なのだった。もちろんそれらのことに関しての当局の処置は滑稽なほどまちがっていた。だがクリフォードにとつては、それが心を動かすことではなかった。彼にとつては当局というもののは *ab ovo* (最初から) 滑稽なものだったのだ。糖果や兵士のことには無関係であった。

そしてまた、当局者たち自身も滑稽には感じていたし、滑稽なやり方をしてもいた。その当座はただもうばか騒ぎだったのである。やがて事態は進展してゆき、ロイド・ジョージが時局收拾に乗りだしてきた。こうなつてきてはもう、滑稽などというどころではなかった。あさはかな青年たちももう笑つたりしなくなった。

一九一六年にハーバート・チャタレイが戦死した。そ